

手と手をつないで

No.359

やまぐち ひろゆき
山口 裕之

(マザー・アース人権啓発研究所主宰)



「杖」 源さんの思い

源さんのことをお話しします。

昭和ひとけた生まれの源さんは若い頃から家計を助けるために夜間の高校・大学に通いながら働き、内面を強くしたいという思いから空手を習い始めました。年月を経て空手道場の師範となり多くの若者や子どもを導き育てる日々を送りました。

初老を迎えた頃、心臓の手術が必要となり、そこでの薬害によりパーキンソン病を発症しました。

日々少しずつ落ちていく機能や衰えていく力と向き合い、やけをおこすことはありませんでした。源さんは、今できることを大切に続けました。リハビリ、読書、写経、竹製マッサージスティック作り…

「おれは長年みてきた畑の野菜や山の草花のように上手に枯れていく」と言っていました。

その後大きな病気がみつかり、長期の入院が決まった時の入院グッズの筆頭はヌンチャクと一本の杖。

ほとんど自力歩行が困難になっていましたが、この杖はいつも病室におかれりハビリの旗印となっていました。



源さんに最期のときが近づき、源さんの家族に看護師が告げました。

「もうあまり時間が残されていません。耳は聞こえているはずですよ」

源さんの妻が耳元で語りました。

「お父さん、よくこれまでがんばりましたね。いっしょにいられて本当に幸せでした」

そのとき源さんの目から大粒の涙が一粒流れ落ちました。

初七日を終えたころ、仕事で葬儀に出られなかった病院のリハビリ担当の人が3人お参りに来られ、仏前でこう語られました。

「源さんはリハビリ室に勝ちを取りに行く勢いで通われてました」

「これまでの事例から源さんが今後歩けることはないだろうという私たちの仕事への心構えがいかにもいい加減であったのかを、源さんは無言で教えてくれたと思います」

「患者さんは、今を生きている。その思いに誠実に寄り添い最大限の支援を行える療法士をめざします」

「私はこれから後進の仲間に、源さんのことを語り継いでいきたいと思っています」

○人はだれもが周囲を照らす存在

病気を発症してから死に至るまでの源さんが示した姿は、死に様ではなく、生き様だったと思います。自分に用意された時間と環境を大切に生かし、自分なりに命を燃やすことの尊さを多くの人々が学びました。人はだれもが自分の周りを自分なりの色で照らせる存在ではないかと思えます。

一本の杖が今日も仏間の片隅にたてかけてあります。